

武蔵野台地の風土や課題などを読み解くための
散策コースづくりの調査・研究と、それに
そった散策会（歴史散歩）の実施

2014年

福田 恵一
小平市立小平第三中学校 社会科教諭

武蔵野台地の風土や課題などを読み解くための散策コースづくりの調査・研究とそれにそった散策会（歴史散歩）の実施

福田 恵一

1. はじめに

立川市にある市民団体シビル（一般社団法人）では、立川市柴崎町にあるシビル（施設）を活用しながら、さまざまな市民団体の活動をバックアップしたり、一方でシビル自身でもさまざまな市民講座を開くなどの活動を行ってきました。

その中で 2008 年より、歴史散歩というフィールドワーク型の市民講座を年数回実施し、主として多摩地区の史跡、文化財などを訪ね、そこから多摩の歴史や風土を考えてきました。

当初は、八王子城跡、高幡不動、甲州街道など、その時々さまざまなテーマ・コースを設定してきました。しかし、そのほとんどの案内・解説を、主として玉川上水をフィールドにして、調査、研究を行い、そしてそれを中学生への授業にもしてきた筆者（福田）が、担当してきたこと、また、とりわけシビルがある立川市も含めた多摩川北岸の武蔵野台地は、河岸段丘の発達した台地ということもあり、飲料水を含む生活用水、農業用水などの確保が大変重要な課題であったこと、それは多摩地区をこえて江戸の町全体に言えること、などからここ数年は、水、とりわけ、武蔵野の発祥とも言える狭山丘陵の谷戸田や国分寺・府中崖線の湧水点と、武蔵野台地の開発に大きな影響を持つ玉川上水とその分水周辺のコースを歩いてきました。

本研究、活動はその一貫をなすもので、2013 年度に行った 3 回の歴史散歩、及び、その水利用の将来性も見すえた小水力発電にかかわるものをまとめたものです。

シビルのパンフレットより

シビルって何するところ

シビルは、市民が交流・学習・活動するための足場を力を合わせて作ろうとしている場所です。シビル市民講座、カルチャースクール「アクティブ立川」やバザーを開いているほか、会議や催し会場としても使っていただけます。

駅に近く、町の中の便利な場所にあります。ぜひいろいろな形で利用してください。

2. 2013 年度の 3 回の歴史散歩

①「遊学の森を歩く」

一回目は、2013 年 7 月 21 日（日）に、「遊学の森」を歩くとして、多摩川の支流、秋川の源流である檜原村の林業家、田中惣次さんの「遊学の森」に行ってきました。田中さんは、この地で 14 代続く林業家。とは言え、今のような杉、檜の育成林業が始まったのは明治以降で、そ



れ以前は、薪炭（特に五日市は炭の集積地として有名だった）、養蚕などもやっていたとか。

「遊学の森」は、その田中さんが自分の持つ 400ha の森林の一部に大学の学生メンバーなどとして協力してつくった森林・林業を理解するための見学コースです。杉、檜が植わった斜面を歩きながら、ひととき大きな樹齢 170 年の杉の大木（立て木）の前で「今売ったら、これで 10 万～20 万、50 年生の杉だと 700～1000 円（檜でその 1.7 倍くらい）、これではやっていけない」と、話が始まります。あじさいなどの灌木や下草の生える道を登ると、暗い森に入ります。そこは、手入れをしない広葉樹林。かつては、広葉樹も薪炭としてお金になったのが、昭和 35 年頃から燃料革命で伐らなくなり、手入れをしなくなった、すると林に光が入らなくなり、下草も生えなくなって雨が降ると土が流れてしまいます。ここで、杉、檜の林だけが荒れているのではない、というのが田中さんの持論です。



尾根に上がると、そこに高さ 2 m ほどの檜が何本か。その前で「この木、何年たっていると思いますか？」と質問されます。苗は 45cm くらいで植えるというのですから…。正解は 45 年、大きな広葉樹に光を遮られ、でも檜は日影にも強い陰樹だから枯れはしないけれど大きくなる。だからこそ、間伐などで光を入れてやるのが大切です。

そのまま尾根スジを歩くと、育成天然林（管理された広葉樹林）に入ります。今は、こうした森にも補助金も出るので、ピザ屋さんに蔦を売ったり、また通直性（まっすぐ伸びるので材になる）のある広葉樹を残すようにしているとのこと。光が入って気持ちのいい森です。

田中さんがめざすのも、最終的には針葉樹と広葉樹の混交林。杉、檜の森も、間伐などして手入れをすれば、広葉樹も生えて、低・中・高木とそろい、生物の多様性も豊かなよい森になる、でもそれには 200-300 年かかる、とのこと。

尾根から谷に下りてゆくと、そこは杉の大木の間に新しく植えた小木がまざる複層林になっています。大木はもう十分材になりそうなので「こうした木は伐ったらどうやって降ろすのですか？」と聞きます。「かつては、丸太を梯子状に組んで『そり道』をつくり、滑らせて降ろしましたが、今ならワイヤーをはってケーブルでしょう。でも、1 本ワイヤーをはるにも経費がかかるから、周辺の木を全部伐らないとペイしない（田中さんはこうした皆伐はせず、3 本に 1 本を伐るといった択伐をすすめ、混交林をめざす）。だからこそ、今必要なのは道なのです。道をつくるのが今の課題。立派な道である必要はない、3 m 幅でトラックが走ればいい。そんな道を年間 3～



4 km はつくっています」。

炭焼き場のあと（かつては 1ha に一つくらい炭焼き場があった）なども見ながら、沢におり、おいしい水も飲みました。

山を下り、昼食後、宿泊も可能なコテージの前で、まとめのお話を聞きました。経済だけが幸せではない、山・森はいいですよ、というお話し的一方で…。今、材としての経済林だけで林業経営をするのは難しい。それは 3 割。あとは補助金など。補助金林業は、いつ梯子をはずされるか（補助金が突然打ち切られたり…）心配な面もあるが、木材以外の森林の価値（CO₂の吸収、環境保全、生物多様性、癒し… など）を認めてもらい、東京都なら 1 人 100 円でいいからそれにお金を出してほしい（すでに高知から始まって、多くの県で、森林環境税などが実施されている）。そうしないと、山から人がいなくなり、林業の技術も伝承されない。山の生き残りとして、人を育て、森を守ってゆきたい、とのことでした。

個人的には、今回、林道脇で、杉の天然更新を見たのが驚きでした。広葉樹のドングリが落ち、芽を出しているのは見たことがありましたが、杉もけっこう芽を出すとのこと。でも、日本では雑草に負けてそれが大きくなるのは難しいとのこと。田中さんは「林道脇の何本かを育ててみましょうか」と話してくれました。



参加者の感想

「遊学の森」がある東京都檜原村は、なんと、93%が森林なのだそうです。そして、その 6 割がスギやヒノキなどの人工林（日本全体では、67%が森林で 4 割が人工林）。江戸時代には、「山の上で江戸の煙が見えたら切り出せ」という意味の歌の文句があったくらい、材木の需要が多く、林業で栄えていたそうです。五日市が町になったとき、新宿や渋谷はまだ村だったと聞きました。それが外国から安い木材が輸入されるようになってからは、すっかり変わってしまったそうです。

スギを植林し、苗の小さい 8 年間は下草を刈り、大きくなったら 3 本を 1 本に間伐し、手間をかけて 50 年間育てます。それを切り出して売ると、1 ヘクタール分 1000 本で、70～100 万円。植林には 1 ヘクタール 3000 本の苗木が必要で、かかる経費が 250 万。経営難から林業をやめてしまった所が多いそうです。

「遊学の森」の隣には、所有者が遠方にお住まいで手入れがされていないため、木が倒れたりして殺伐とした森が広がっていました。密集して日光が届かない森は、下草も生えないので、雨が降るたびに土が流されたり、鹿が木の芽を食べてしまう原因にもなるそうです。幹がかじられた木もありました。遠くから見るときれいでも荒れた山はたくさんあるそうです。荒れた山の木はどうなってしまうのでしょうか。木の幹を深く剥き取り、立ち枯れさせて整備するしかないかもしれない・・・と聞いて悲しくなりました。

材木にする木を切る旬の時期は、「秋、ススキの穂が出そろったとき」だそうです。9、

10、11月の木は乾いていて腐りにくいからで、12月になると木が水を吸い始めるので、川の水量が減ってくるのだと聞いて、びっくりしました。逆に、木が水を排出する時期は、川の水かさが増えるのだと聞いて、またまたびっくりです。

日当たりの良い林道沿いには、自然に生えたスギの芽がたくさん出ていました。「遊学の森」の入り口には、50センチくらいの小さなスギが、植えてありました。まっすぐに立ち並んだスギ林はとてもきれいで、花粉症の犯人扱いはかわいそうでした。

急斜面の山歩きはちょっと恐かったのですが、森の空気を吸って、森の湧き水を飲んで、秋川でトンボやオタマジャクシを見て、ジャガイモアイスを食べ、幸せな一日でした。もちろんお土産はジャガイモ。夕飯のおつかいのとき家のそばのスーパーで、檜原村のこんにゃくを幾種類も発見しうれしくなりました。

②玉川上水 烏山分水を歩く

二回目は、さまざまに考えたのですが、まだそれまでに見ていない分水を歩いてみようとして、烏山分水を選びました。小平市以東の分水は、ほとんどの分水の取水権が放棄され、また暗渠化も進んでいて、水辺歩きをすることができません。わずかな分水の痕跡をたどるコースになるのですが、烏山分水は、すぐに烏山川という自然河川に落とされるため、水路跡がたどりやすこと、烏山川源流の湧水点の鴨池があること、またその周辺は寺町となっていて、散歩コースとして適していること、さらに少し歩くと雑木林を残す蘆花恒春園があること、などから芦花公園周辺の紅葉に合わせ、11月16日（土）に実施しました。

スタート地点は、京王井の頭線久我山駅です。駅を出るとすぐそこを神田川が流れていて、橋をわたる人見街道はどちらに行っても上り坂、ここが神田川の谷になっていることがわかります。商店街のある坂を登って玉川上水の岩崎橋（岩崎通信機の本社がある）に出ます。坂を登って水路があるのですから、こちらは人工的な用水路。やはり玉川上水は周辺で一番高いところを流れていました。



この日の参加者用レジュメより

○神田川

井の頭池を水源とする自然河川 善福寺池・妙正寺池など武蔵野台地の湧水点（標高 約50m）から流れ出る川を合わせ、江戸へ

これを、江戸初期、飲料用にしたものが「神田上水」

- ・ 関口、大洗堰で水位を上げ、台地上にも排水
- ・ 外堀にも利用するため、下流部ではつけかえ 平川→神田川

○烏山分水

1791（寛政3） 幕府の普請方、石野広道による『上水記』に記載あり

- ・上高井戸で取水し、烏山村など10ヶ村の灌漑用水として利用
 - ・25寸坪 開口部が15cm 四方 長さ4里半=6km
 - ・烏山川、その水源である鴨池に落とし、田用水として利用されて目黒川へ
- ※用水路 高いところを通す（できれば尾根）が、使いたいときは谷に
『玉川上水武蔵野ふしぎ散歩』 p 84

岩崎橋のすぐ下流にきょうの目的、烏山分水の取入口の跡があるとのこと。橋からのぞいてみると確かにそれらしき取水口の石柱を発見。いよいよここから分水跡をたどります。水路は公園風の岩通ガーデンの中を通っているはずですが、もうここからは、はっきりしません。もちろん、水も流れていません。



その岩崎橋から烏山分水（跡）を探します。下本宿通りに出て、北烏山住宅の団地の中に水路跡を発見。烏山分水はこのあたりでいくつも水路に分かれて流れていたようです。久我山病院までもどって松葉通りを下っていくと、「ありました！」明らかに水路跡の道が家の間を抜けながら西に向かっていきます。烏山川の源流、鴨池に向かう水路は2004年の昭文社の地図にも載っていて、水路がつい最近まで残っていたことがわかり、暗渠になった今もその上の遊歩道をたどることができます。

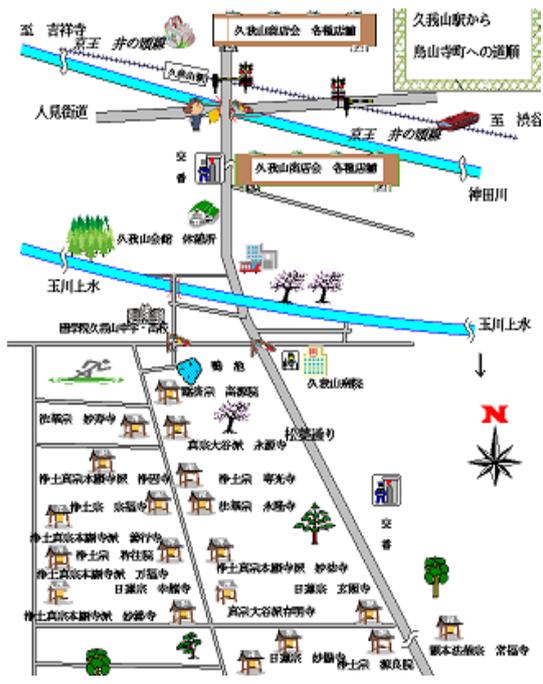


しばらく歩くと、高源院の中に鴨池が現れます。烏山川の水源で、烏山分水はこの池の助水ともなっていたのです。睡蓮が茂り、鯉や亀（ミジッピアガミガメですが）が泳ぐ鴨池は、やはり武蔵野台地の湧水点、井の頭池や善福寺池とほぼ

同じ標高約45mです。

ここからはしばらく烏山の寺町を歩きます。道に沿っていくつもの字院が並んでいるのですが、この地に「寺町」ができたのは昭和初期、1923（大正13）年の関東大震災で焼け出された下町（浅草、築地、本所）から寺院が移ってきたのが始まりです。専光寺には喜多川歌麿の墓があります。

静かな寺町通りは散歩道としては悪くあり
(久我山商店会のHPより→)



ませんが、今回は烏山分水歩きですから、また松葉通りに戻って、水路跡を探します。

すでに、このあたりでは分水は、烏山川に合わせられ、2本の流れとなって田んぼの中を流れていたようです。烏山団地・住宅の中に、水路跡があちこちに見られます。ほとんどが暗渠になっていていますが、流路跡が遊歩道になっていたり、橋の跡が残っていたりするのでたどることができます。

中央高速をくぐり、甲州街道（新道）をこえて、流路が住宅街に入ってゆきます。旧甲州街道を歩くと、東に向かってわずかに下り坂、とすれば、その坂を下りきったところに烏山川があるはずですが、行ってみると、ちゃんとそこに川の流路跡が残り「橋場」と書かれた標識も立っていました。



水路跡が京王線を越えたところで、芦花公園駅方向に出て、昼食タイムです。ところが、芦花公園（蘆花が住んだ恒春園が公園になった）駅に出たところで私（福田）の自宅からメールが入り、要介護5の私の父が誤嚥性肺炎で緊急入院したとのこと、昼食までつきあって家に戻って病院へ行かざるをえませんでした、したがって、ここからはともに下見をしたスタッフが案内して蘆花恒春園をめざしました。

徳富蘆花が、ここに住み著作活動を行った蘆花恒春園は、今も雑木林を残す公園の中に、



資料館とともに建っています。さらに、徳富蘆花はその著作『みみずのたはごと』の中にその周辺ようすをかなり克明に書いており、それは国木田独歩の『武蔵野』とともに、武蔵野のようすを語るエッセイとして有名です。

それによれば、ここ周辺は、烏山分水を合わせた水無川（水無、烏山川はこの下で合流し、さらに目黒川になる）の谷にそって谷戸田が広がり、そこを三鷹から品川領分水が、築堤で高いところを流れていた、ということです。

参加者用レジュメより

○蘆花恒春園

『不如帰』で有名な、明治の文豪、徳富蘆花／健次郎（1868～1927）が、「美的百姓」をめざし、1907（明治 40）から妻・愛子とともに半生を過ごした住まいと庭、それに蘆花夫妻の墓地を中心とした旧邸地部分からなる公園

徳富蘆花が、人道主義・自由主義的な小説を書く一方、兄の徳富蘇峰（ジャーナリスト、『国民新聞』などを創刊）がしだいに国家主義的傾向を強めたこともあり 1903（明治 36）年、蘆花は、兄に向け「告別の辞」を発表し、絶縁状態となる

※水俣出身で、同志社に入学 熊本バンドとして知られ、NHK『八重の桜』では、その蘇峰／猪一郎を中村 蒼が演じていた

『みみずのたはごと』は、蘆花がここ糞谷村での生活をまとめたものです。

ただ、独歩の『武蔵野』もそうですが、武蔵野台地を決して雑木林として描いてはいません。どちらかと言えば、小さな谷戸田とそれを囲む台地として書いているです。

この日は、芦花公園で終了の予定でしたが、参加者は烏山川歩きをさらにすすめ、環八通りを越えて、小田急線経堂駅まで歩いたとのことでした。

『みみずのたはごと』より

「彼の家（恒春園）の家の下なる浅い横長の谷は、畑が重で、田は少しであるが、此入江から本田圃に出ると、長江の流るゝ様に田が田に連なっている。まだ北風の寒い頃、子を負った跣足の女の子が、小目籠と庖丁を持って、芹、嫁菜、薺（ナズナ）、野蒜、蓬、蒲公英（タンポポ）など摘みに来る。紫電英（レゲ）が咲く。蛙が鳴く。膝まで泥になって、巳之吉亥之作が田螺拾いに来る。蓑笠の田植は骨でも、見るには画である。… 」

「机に向こうて、終日兀座。

外は今にも降りそうな空の下に、一村総出の麦収納。此方では鎌の音簾々。彼方では昨日刈ったのを山の様にして積んで行く。時々賑やかな笑声が響く。皆欣々として居る。労働の報酬が今来るのだ。嬉しい筈。

例年麦秋になると、美的百姓先生の煩悶がはじまる。余は之を自家の麦愁と名づける。先生の家にも、大麦小麦合わせて一反そこらの麦を収納するが、其れは人を傭うたりして直ぐ片づいてしまう。慰みにくるり棒を取った処で、大した事も無い。買った米を食う先生には、大麦の二俵三俵取れたところで、何でも無いのだ。単純な充実した生活をする農家が今勝誇る麦秋の賑合の中に、気の多い美的百姓は肩身狭く、憊れた心と焦々した気分で自ら己を咀うて居る。さっぱりと身を捨てゝ真実の農にはなれず。さりとして思う様に書けもせず。彼方を羨んで見たり、自ら憐んで見たり。中途半端な吾儘生活をする罰だ。致方は無い。もとより見物人も役者の一人ではある。然し離れて独り見物は矢張寂しい。

終日懊悩。夕方庭をぶらゝ歩いた後、今にも降り出しそうな空の下で縁台に腰かけて、庭一ぱいに寂寥を咲く月見草の冷たい黄色の花をやゝ久しく見入った。

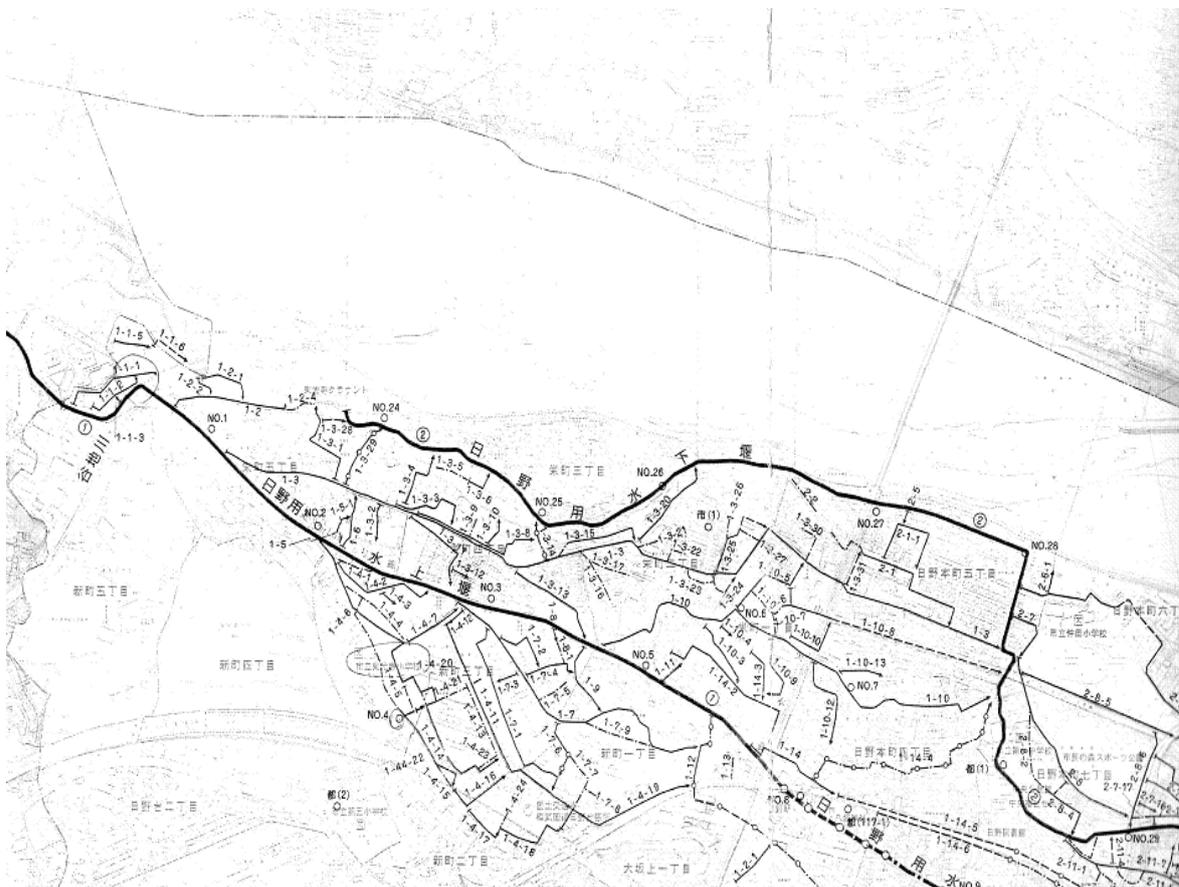
明治四十五年 六月五日」

③日野用水と日野宿を歩く

3月9日（日）、シビル歴史散歩「日野用水を歩くー用水と街道がつくった宿村の原風景」に、主催者スタッフとして参加してきました。いつもなら私が案内人になって、主として玉川上水やその分水にからめた武蔵野台地を歩くのですが、今回は日野市立七生中学校の関誠さんを中心に、日野市内の今も生きている用水歩きのコースを作ってみました。

日野は、もともと武蔵野台地と同じ多摩郡ではありますが、多摩川南岸の南多摩であり、北岸のような河岸段丘が発達せず、すぐに丘陵地帯が迫っています。さらにそこを浅川を

はじめとする中小河川が流れ、それが谷戸田をつくっていたり、用水路がひかれたりして
いて、この地域では比較的水田の多い豊かな地域であったと思われます。



(↑ この地図は、日野市が1990年に作成した水路の現況。上に広がるのが多摩川である)

出発地点は、JR日野駅、今回も10名が集まりました。駅ターミナルから一本北に入ると、もう日野用水の幹線（上堰）が流れています。関さんからもらった日野市作製の市内用水路地図（上のもの）を見ると、上堰・下堰に分かれた日野用水の幹線から多くの枝線が、縦横無尽に流れており、そのほとんどが生きていて、見えるところでは田んぼに向かっています。また枝線の分岐ごとに水位を調節するためのサブタを



差し込むホゾ、
また小さい水路では、ちょっと水位を上げるための石ころなどがかれて、それはみごとです。

しばらく行くと「よそうの森公園」、ここでは周辺の田んぼに小さな水路がはりめぐらされている様子が見てそれます。と同時にここはもともと小高い

丘になっていて、米の取れ高を予想する、たぶん年貢の検見をする場所だったらしい、だから「予想」なのです。

またしばらく行くと今度は「水車の森公園」、用水に直径3mほどの水車がかけられています。もちろんこれは復元した水車ですがホンモノ。でも動かしたところ音がうるさいとのことで止められ、やや朽ちてきているのが残念です（でも翌年度には、また修理して動かすのだとか）。



水車小屋に入ると、搗き臼が一つだけ、粉挽きではなく米搗き用に復元したらしいし、しかも下がけですから挽き臼までは無理だったのかもしれない。

さらに行くと道は宇津木台に向かうバイパスとなり、それに沿って水路が流れ、いよいよ谷地川（多摩川の支流、自然河川）との交差です。立派な水道橋が、谷地川を越えていました。ただ、これはどうも新しい。実はそこを流れる谷地川は付け替えが行われた新しい川で、もとの谷地川はもう少し上流で多摩川に流れ込んでいたので、本来はその谷地川



から取水していました。谷地川の改修にあたり取水口が変更されたとのこと。もともと川に負荷のかかる取水口あたりは、もともと壊されやすいこともあり、このような改修は、近代以降さまざまに行われています。こうしたことから、逆に水路が今も生きることがわかります。

帰りは、途中から北側の下堰に沿って歩くことに。ここでもあちこちで、田んぼに引かれる小さな用水が見てとれます。

帰りは、途中から北側の下堰に沿って歩くことに。ここでもあちこちで、田んぼに引かれる小さな用水が見てとれます。

でも幹線はもちろん、主な枝線水路も豊かに水が流れていて、その景色は、玉川上水の分水歩きとは全く違います（水量も使用目的も、そして現役であることも）。

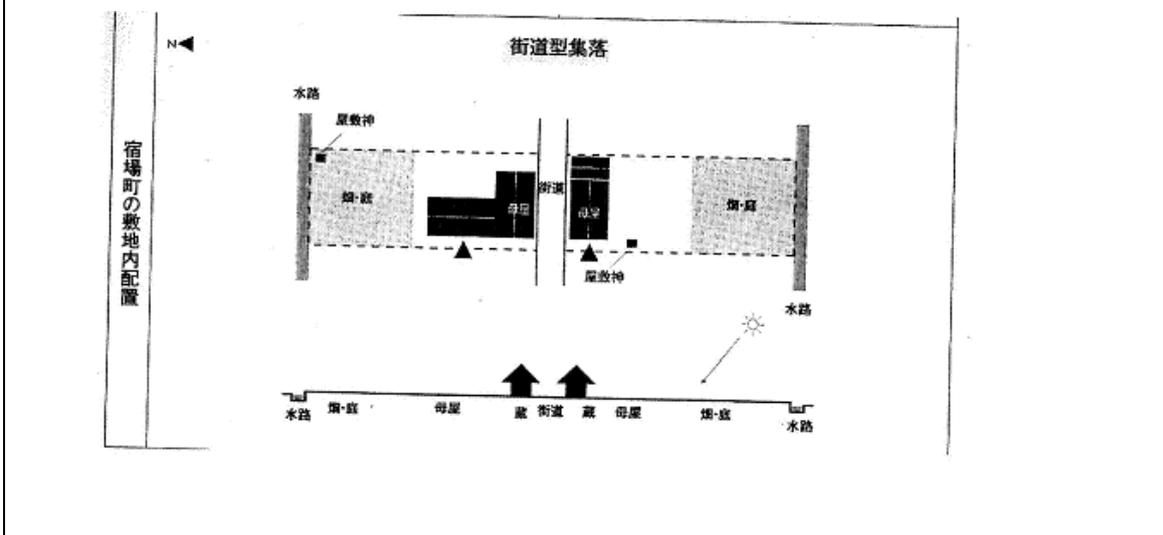
日野駅に出て、甲州街道にそった米屋の店蔵を改造したというギャラリー・カフェで昼食&お茶を飲みながらまとめの会をして、そこから日野宿を歩き、（脇）本陣でもあった佐藤家によって帰りました。

当日のレジュメより

用水と谷地川の交差点を見たら、用水上堰から取水する日野用水下堰を下りましょう。甲州街道制定以前の旧街道ぞいの集落の敷地割、さらにくだり甲州街道ぞいの日野宿の屋敷割が見られます。水路と街道にそって特徴的な短冊状の屋敷割を見ることができます。

日野宿は、都内で唯一の本陣建築が残り（佐藤彦五郎屋敷。敷地内に天然理心流道場もあった。佐藤彦五郎は下家なので、本当は脇本陣）。江戸から昭和にかけて建てられた蔵

建築がいくつも残っています。お昼は、明治のはじめに建てられたという店蔵を改修した大屋というカフェによりましょう。



日野の豊かさを感じつつ、「ここは武蔵野ではない」（八王子を断じて武蔵野台地に入れない、と言った独歩は正しい？）と感じた用水歩きでした。

3. 小水力発電講座

小水力発電とは、小さな川や水路の落差によるエネルギーを利用した環境に負荷をかけない 1000 k w 以下の発電です。この発想は、武蔵野の水路におけるかつての水車の現代版



とも言えるものであり、歴史散歩の講座と並行して、シビルの連続講座として行いました。とりわけ8月24日には、小水力やソーラー発電などで市民発電をめざす藤野電力から池辺潤一さんに来ていただき、立川市に許可を得た上、シビルにも近い（シビルは、立川駅と同じく府中崖線の上の台地上にあり、そこから数百m南にいくと崖線となり、その下のハケの湧水を集めて根川が流れている）柴崎体育館前の根川に、藤野電力の「ピコピカ」を設置して、発電実験を行い、3WのLED電球に明かりをつけました。

3. 11以降、こうした活動は、環境面からも関心が大きく、この講座には毎回10~20人の参加がありました。

ただし、この活動と、歴史散歩などが結びついた活動にはなっていないので、今後こうしたさまざまな活動との関連・連携を模索してゆくことが課題であろうと感じています。

参加者の感想

「根川緑地で小水力発電を！」に参加して

根川は、立川市柴崎体育館前の根川緑地を流れる、幅80cm、深さ10cm程度の小川です。

ここに池辺潤一さん（藤野電力小水力部門担当）を招いて、ピコピカ発電機と池辺さん手作りの水車発電機を設置して発電できるかを試してみました。参加者が実際に水の中に入り、石を集めて積み上げて、水かさをあげて流れを速くしました。水の中にあった土嚢が役にたちました。石と石とのすきまから水が流れてしまったり、手ごろな大きさの石がなかったり、なかなか思うようにいきませんでした。それでもみんなで工夫してせき止めました。そこにピコピカを置いて発電開始なのですが、水がうまく流れません。周辺の石をどけたり、また積み直したりして川底を整えて再度設置して、何とからせん状の水車ピコピカが回りました。LEDの電球も見事明かりがつかしました。藤野電力手作り水車の方は、なかなか難しかったのですが、これも何とか回って明かりをつけることができました。

この場所に、小水力発電による街灯を設置して、体育館や緑地に遊びに来る人たちに小水力発電への理解を深めてもらうことができるといいと考えています。

4. 歴史散歩のコースづくり

一方で、玉川上水やその分水などから武蔵野台地の風土を読み解くための歴史散歩コースづくりを、今回3回の歴史散歩の下見をはじめ何回かに分けて行いました。中には、どこかに出かけたついでや、たまたま見つけた水路もありますが、それらも後の検討材料としては大変有効でしたので、そのまま収録します。

① 玉川上水の分水を歩く

5月13日には、国分寺村分水めぐり。とは言え、昭和30年代にその役目を終え、埋められたり、暗渠化されたりしていますから、これはなかなかの上級者コースです（でも、ネットを見ているとそんなコース歩きをやってブログに書いている人が何人かいるので、それを参考にして歩きました）。

スタートは、西武国分寺線鷹の台駅、すぐ近くを玉川上水が流れ、国分寺村、恋ヶ窪村、貫井村分水を合わせた取水口があったはずなのですが、このあたりの分水は1870（明治3）年の通船開始時に、南側は砂川分水、北側は新堀用水からに整理されたので、1657（明暦3）年の分水開削当時の遺構は全くありません。

小平中央公園に入るうさぎ橋には、この年話題となった「都道建設にかかわる住民投票」を呼びかける看板とビラが置いてありました。その都道が完成するとこのすぐ先をつっきるのです。この問題も、玉川上水とその周辺の環境問題と道路建設という時宜にあった課題なのですが、その話は、またそのうちゆっくり話題にするとして、この日は、住宅街を南に歩きます。

五日市街道に出たところが砂川分水と国分寺分水の分かれる二ツ塚、ここから府中街道の西側に行く桜並木の道が、分水跡です。すぐに窪東公園があって、公園内に水路がありますが、これは後のモノ。しばらく行くと、府中街道と恋ヶ窪の交差点で合流します。

ここで、貫井村分水は連雀通りにそって西に向かいますが、国分寺分水はやや南に向かい、恋ヶ窪分水を分けて、国分寺駅方向に向かいます。とは言え、それらしい農道がいろ

いろいろあって、ここで迷ってしまいました。地形的には、野川の上流の谷の西側へ回り込むはずですから、下り坂ではないはず（下ってしまえば野川の谷）。

唯一の目印は、国分寺市が立てた「歴史と文化の散歩道」の石碑だけ。その石碑の建つ“孫の湯通り”に出ると、突然、銭湯、孫の湯が残っていて営業中。思わず一風呂あびてしまいました（タオルはいつもカバンに入っている）。

その石碑をたよりに道なりに行くと、水道局の水源（井戸）、浄水場が現れます。こうした水道関係施設は、水路跡に建っていることが多いのです。道は、ゆるやかに南に曲がって、日立の中央研究所の裏に出ます。途中、マンションのワキを研究所の森に向かう不自然な道も水路跡かもしれません（この研究所の中の池が野川の水源の一つ）。



道は、野川の谷をよけるように研究所の壁に沿って南進し、花沢橋で中央線を渡って駅の南側に出て行きますが、きょうのコース研究散歩はここまででおしまいです。

8月21日には、小平市内の鈴木分水を歩きました。この分水は、この当時の私の勤務していた小平市立第三中学校の学区にも来ているので、その部分は歩いたことがあります。

出発点はやはり鷹の台駅。玉川上水に沿って（実は新堀用水）西武多摩湖線を渡る桜橋を渡ると、この部分は地下で見えませんが、鈴木分水が分かれています。でも、その分水の流れは、住宅街の中に顔を出しています。警察学校の手前で、鈴木分水と田無分水が分岐、鈴木分水はいったん小平団地の中に流れてゆきます。

鈴木街道にそって行くと、一部、分水をたどれる部分があって、鈴木分水と大沼田分水の分岐の堰が見られます。小平市は、この分水に多摩川本流の水を流しているのですが、今年は天候のせいなのか、新堀用水からずっと水が流れていません。



しばらく行くと、鈴木稲荷神社。鈴木分水を開削し鈴木新田を開発した貫井村（小金井市）の鈴木利左衛門が、新田の鎮守としてつくった神社です。

そこで、鈴木分水は、街道に沿って南北2流に分かれ、街道に沿ったそれぞれの屋敷内を通ります。南に出て、たてに短冊形に区切られ、屋敷森に囲まれた屋敷地・畦畔茶で区切られた畑、という典型的な新田村のようすを見ました。

もうここは、鈴木新田、現在の小平市鈴木町で、そこに小平三中があります。最後は、青梅街道に出て、小平ふるさと村で、神山家住宅や復元された水車小屋も見ました。

ここを組み合わせれば、ここは玉川上水と武蔵野の新田開発を考える絶好のコースができそうです。

2014年1月には、代官山に行きました。（そこに新しくできた書店を訪ねたのですが）代官山は東横線で渋谷の次の駅です。ただ今回は、逆に横浜側から行きますから中目黒の次になります。中目黒は目黒川の谷です。このあたりから車窓を眺めていると、進行方向左手から明らかに川跡と思われる緑道が下りてきています。調べてみたら、蛇崩川、この川は、世田谷・弦巻の馬事公苑を水源に、三軒茶屋の近くを流れ、中目黒で目黒川に合流するのだとか。1970年代に暗渠化され緑道になっています。さらに、その水源は、玉川上水最長の分水、品川分水の排水路、悪水吐（余水吐）についていると言うのですから、ここでもまた台地上は玉川上水です。ちなみに目黒川の最上流も、烏山・北沢分水です。

中目黒を出ると東横線はトンネルに入ります。代官山は、渋谷川と目黒川を分ける山（尾根・台地）なのです。駅は、そのトンネルの出口にあって、駅前からしゃれたお店が並びます。お目当ての書店に行くには、駅からなだらかな上り坂を行きます。『春の小川は、なぜ消えたのか』（田原光泰）によれば、この台地上を玉川上水を笹塚で分けた三田分水が流れているはずですが、三田分水は、1974年すでに廃止されていますから痕跡すらないのでは（自然河川は暗渠化されても水は谷筋に流れるので、緑道になっていたりして、だいたいがたどれますが、用水路は、埋め立ててしまうとアトカタもなくなることが多い）…。でもこの分水も足の長い用水ですから、セオリ一通り尾根の最高点を流れているはず、となるとその書店が面している旧山手通りが一番あやしい。

さっそく、その書店で、それらしい本を探してみました。東京の水辺、川筋を歩く本は、けっこう出ていて本棚にも並んでいます（残念ながら私の『玉川上水武蔵野ふしぎ散歩』はありませんでした）。それらを見ると、やはり、その旧山手通りに沿って三田分水が流れ、直ぐ近くからは猿楽分水が出て、恵比寿駅周辺の渋谷川の谷戸田を潤していたことがわかり、その跡らしき道も見つけました。ここでも台地上は玉川上水だったのです。

中にコーヒーショップが入っていて、ところどころにベンチも用意され、本を探し、読みながらくつろげるというこの書店で、結局いろいろ出版されているこの手の本の中から『地形を楽しむ東京「暗渠」散歩』（本田 創）を買いました。こうした先行研究をベースに、地形、川と用水、そしてその土地の使われ方、歴史、そして風土みたいなものをつなげて考えながら実際に歩く、というのが私にできることかな、と考えました。

② 台地を削る都心の小河川を歩く

6月29日に、中野の桃園川緑道を歩きました。桃園川は、荻窪の天沼・弁天池を水源にして、中野の末広橋で神田川に合流する小河川で、大正期までは周辺に田んぼもありました。それでも大雨の時には氾濫して被害ももたらしたとか、そこで流路が整備され、昭和40年代には暗渠化されたとのこと。田んぼがあった頃は、千川用水から分水も引いたとか、やはり都内の水路はみんな玉川上水とつながっているのです。さすが玉川上水。

桃園川は暗渠になっていますが、ところどころ橋の欄干だけが残っています。緑道は、住宅街やマンションの中を進みます。旧稲荷橋、谷中橋、中山谷橋と橋の欄干が残ってい

ます。しばらく行くと環7と交差、環7がここから南に上り坂になっていることからここが谷であることがわかります。地形が谷になっているのですから、自然河川であることは間違いないようです。緑道は、そこから東に向かっていきます。とにかく上流にたどってみることにしました。北に曲がれば中央線に、南に曲がれば青梅街道・メトロ丸ノ内線に出るはずですが。この日はそのつもりではなかったもので、地図も土地勘もありませんが、まあ、何とかなるでしょう。何か発見もあるかもしれません。

しばらく行くと、緑道沿いにカフェがあったので、コーヒーブレイク。そこで、聞いてみると、緑道は阿佐ヶ谷駅まで続いているとのこと。

そこからちょっと歩くと高円寺がありました。三つ葉葵のついた山門（徳川家光が鷹狩りの時、ここに立ち寄った）を見て、きょうの散歩はここでおしまい。ねじめ正一の『高円寺純情商店街』の舞台となった商店街を歩いて高円寺駅に出ました。

8月9日、杉並区立郷土博物館に出かけました。武蔵野台地の水路歩きのコースをいろいろ考えている中で、その博物館が「杉並の川と橋」という冊子を出していることがわかりさっそく電話したところ「残り1冊だけあります」とのこと。さっそく予約して「数日のうちに取りにゆきます」と連絡したのです。

杉並区も武蔵野台地の上、そこを妙正寺川、桃園川、善福寺川、神田川などの小河川が小さな谷をけずって流れ、そこに玉川上水とその分水である千川用水などがその合間の高台を流れ、入り組んでいます。一つ一つの谷と台地の間の崖は、ほんの数m高さしかなく、しかも周辺はすべて住宅地になっているので水路探しは上級編でしょうか。

高円寺駅から永福町行のバスに乗って和田堀公園で降ります。すぐに一段低くなった野球場が見えます。「これはきっと善福寺川の遊水池だな」と思ってよく見ると、洪水時の入水口や排水用の水門があつて「やっばりな」と嬉しくなります。

善福寺川を渡って博物館に行き、常設展を見ます。小河川が多いこの地には、原始、古代から中世、近世の遺跡が残っています。しかし、全体には武蔵野台地ですから、農家の地割りや屋敷森、雑木林などは、小平と変わりません。

本を買ってから、少し善福寺川に沿って歩いて見ることにしました。ここから少し上流に、天保年間に善福寺川から桃園川に田んぼの助水として用水路を引き（天保用水・新堀用水）があつたと思うので、そこまで行ってみよう…。

和田堀公園周辺には、縄文期の松の木遺跡に復元住居があつたり、善福寺川のほとりに釣り堀があつたり…。もう少し涼しければ気持ちの良いコースかもしれませんが、いかんせん暑い！

このあたりでは、善福寺川はウネウネと蛇行しています。地図で見るとそのウネウネをショートカットする道があるので、そこに行くと必ず坂を登らせられ、



しかも台地の上に出てしまうと住宅がびっしり建っていて、川の流れがどっちにあるかわからなくなります。谷がうねっているから川がうねるので、ショートカットでは山越えを強いられる、考えてみれば当たり前のことなのですが、地図だけを見ていると平面に見えてしまいます。

五日市街道を、尾崎橋で越えて、天王橋から北に上がると、須賀神社があり、そのワキに成宗弁財天社があります。かつてここに善福寺川から桃園川に抜ける水路が通っていて、この地には弁天池という池もあったのだとか。この水路は、山越えで今の杉並区役所付近を隧道（胎内掘り）でぬけていたそうです。きょうの散歩はここまで、たぶんその水路の上を走っていると思われる「すぎ丸バス」で阿佐ヶ谷駅に出ました。

11月23日は、世田谷区池尻の世田谷ものづくり学校（廃校した旧池尻中学校跡地）出かける予定があったので、そこから渋谷周辺を歩いてみました。

学校は、台地上にあって最寄り駅で玉川通り（国道246号）の田園都市線池尻大橋駅に向かって下り坂です。池尻大橋という地名からしてここは谷でしょう。そこから渋谷に向かって玉川通りをしばらく歩くとはたして目黒川が流れていました。しかし、まだここは渋谷（川）の谷ではありません。

北へ駒場の高台に登り、さらに目黒川の支流の谷を越えて、山手通りを横切ります。実は、この山手通りが、ほぼ三田用水の水路（跡）に沿っています。三田用水は、玉川上水を笹塚から分水して、台地上を流れ、大崎で目黒川に落ちる江戸六上水の一つです。その一部は、エビスビール工場（現在の恵比寿ガーデンプレイス）にも引水されていました。やはり、ここでも台地の上は玉川上水です（三田用水は1974年に廃止）。

井の頭線神泉駅へ。井の頭線の渋谷～神泉～駒場東大前駅のトンネルは、渋谷川と目黒川を隔てる台地を貫いています。円山町からまた松濤の台地に登って戸栗美術館（やっていた特別展「青磁名品展」にそそられました、それはあきらめて）を右折し、観世能楽堂の前の坂を下りて、やっと渋谷川の谷に出ます。この辺りは、渋谷川や目黒川の支流が台地を削っていて、複雑な地形です。また、そこを流れる河川や用水には大正・昭和初期まで多くの水車がかけられていたとか…

渋谷川の本流は、山手線の方へ流れてゆくので、ここはその支流、宇田川の谷です。坂を下りていくと、宇田川の流れが遊歩道になって続いていました。当たり前ですが、やはり水が一番低い谷を流れるのです。渋谷の宇田川町に続くビル街の中を遊歩道はウネウネと続きます。道が交差すると、東側に代々木公園の高台が見えます。宇田川は、代々木公園の崖線を流れる川だったのです。遊歩道に沿ったカフェなどをひやかしながら…

しばらくいくと井の頭通りに出ます。この辺りを流れていた宇田川の支流、河骨（こうぼね）川が、文部省唱歌「春の小川」のモデルになった川だとか。電柱に「春の小川はこの通り」という表示があ



りました。かつて、周辺には春にはレンゲの花の咲く田んぼがあったのでしょ。近くに歌碑もあったというのですが、それは帰ってルートを調べ直してから知りました。代々木八幡駅に出て、この日のコース研究散歩はおしまいです。

他にもこの年には、六本木台地と古川周辺（芋洗い坂周辺）、水道橋付近の神田川（御茶ノ水堀周辺）なども歩いています。

5. これからの課題と 2014 年度の活動

私自身、それなりに玉川上水や武蔵野台地について調べたり、実際に歩いたり、そしてそれを中学校社会科の授業などでも取り上げてきました。しかし、それらはあくまで先行研究の上に立った活動であり、純粋な研究者でないし、また研究者にはなれない、とも思っています。

そうした中で、私ができることがあるとすれば、さまざまな先行研究も活用しつつ、市民目線で武蔵野という風土、自然と人間の関係のありようなどを考えていくことだろうと思っています。

多摩川北岸の武蔵野台地では、河岸段丘の発達や関東ローム層などの自然条件から、玉川上水の役割は大変大きなものを持ってきました。そこで、私（たち）の活動は、当面、玉川上水を主とする歴史散歩を開催し、シビル会員だけでなく多くの市民とともに、地域の歴史や文化について考え、それをもとにしながら、自分たちの今の暮らしぶりをもう一度考え直してみることだろうと思っています。

したがって、その歴史散歩は、レクレーションとしての散歩や、趣味の歴史散策、また「玉川上水」や「分水」を歩くことそのものを目的にするものであってはならない、と考えています。単なる蘊蓄や教養としての歴史ではなく、今の自分たち（自分の住んでいる地域）につながる、自分たち（地域）を見直すものでありたいと思うのです。

現在の多摩地区は、武蔵野台地に限らず、東京一極集中の中で、東京に従属した郊外の住宅都市という性格だけを色濃く持っています。町が発展すればするほどその町の個性は失われ、同じような駅、駅ビル、駅前にはチェーン店の飲食店が並び、バイパス沿いにはやはり同じような大手量販店、チェーン店が並んでゆきます。

でも、大きな意味での自然（基本的な地形とか気候など）は作りかえられません。とすれば、それぞれの地域にその風土性が残っているはず。また、地産地消を持ち出すまでもなく、そうした地域の風土を活用することは、環境にもやさしい面を持っているはず。

そうした風土にもう一度着目してみたいと思うのです。

もちろん、「市民目線で」ということも重要な観点としているので、純然たる調査、研究でもありません。散歩自体を楽しむこと、また主催する側としては、風土と人間関係が見やすいもの、をコースに組む必要があるだろうと考えます。

その意味では、台地上に上がってからの玉川上水をたどるだけではコースになりません。

分水をたどり、そこに新田開発や水車経営とのつながりを見たり、まだまだあちこち残る畑、農業（都市農業）を見たり、時には谷戸の田んぼや水源の森（ここでは林業も視野に入れて）、河口の干潟（ここでは漁業も）などまで視野に入れつつ、かつ歩いて気持ちのいいコース、見どころのあるコースが求められます。

2013年度の歴史散歩、コースづくりに即して言えば、水のない水路跡探し（水車のない水車跡さがしや、谷戸田の跡さがし）は、それ自体の意味が大きくても長時間の散歩には耐えませんが、水がある風景は、それだけでいいものです。その意味では、目黒、渋谷、神田川など、都市河川となってしまった川を歩くことも、その目的が見失われたり、昔のようすがイメージしきれないなど、かなりのリスクがあると言えるでしょう。

そこで、2014年度の歴史散歩は、まず、恒例の「羽村の堰から田村分水まで」のコースに立ち戻りました。まだ玉川上水が生きている区間で、水辺ある歩きが楽しめること、玉川上水が武蔵野台地に登る（もちろん実際には登らない）というダイナミズムが見えること、から、基本コースとして取り入れることにしたのですが、そのねらいは的中し、徐々に30人が参加する歴史散歩になりました。

ただ、新しい分水歩きへの挑戦も考えようと、初めて柴崎分水をたどるコースを取り込みました。この分水も生きているため、水辺歩きを楽しめます。しかし、実際に水を使った村（柴崎村＝立川市内）が取水口から距離があり、その間に昭和記念公園（旧陸軍、その後米軍立川基地）をはさんでいるため、村の中での分水のありようまではたどれません。一方、こうしたすでに使われていない分水にも水が流されているのは、環境保全という役割を持っているとされます。そのためもあってか、この分水は大山街道からさき旧基地敷地内に入ることもあって暗渠になっていますが、そこまでは一部、両側が土の堤、または石積みになっていて、かつての「小川」を彷彿とさせます。時期が夏（7月13日実施）であったこともあり、途中、その水路で水遊びをする子どもたちに出会いました。そのことから、環境保全が単に景観の保存にとどまらず、新たな意味をもっていることがうかがわれました。こうした分水の活用は、福生市内（田村、熊川分水）、昭島市内（拝島分水）、小平市内（小川、大沼田、鈴木分水など）にも見られ、そのより積極的な活用が望まれます。

また、歴史散歩で現場をフィールドワークするだけではない活動も考えられます。2013年度に少し触れた小水力発電についての議論や研究もその一貫でしたし、歴史散歩の参加者の多くが立ち止まる野菜の直売場などから都市農業や、つい最近まで盛んであった都市近郊の畜産や酪農にも触れたい。さらには水辺の環境をその生態系など自然科学的に考えたり、調査、体験などの活動、また、それらを利用した公園のありようなどの調査、研究も必要性を感じています。

そこで、2014年度は、年3回の水辺歩きをベースに



した歴史散歩に加え、水を中心に武蔵野を考える連続講座も予定しています。①武蔵野はどこから開けたか ②玉川上水の開削と新田開発 ③多摩の自由民権運動 ④多摩は復権するか（いずれもテーマは仮題）足下の風土を歴史的に考えながら、それをどう現在につなげていくか。大きく言えば、それが課題であろうと考えています。

参考文献

- 『武蔵野の水路図解 武蔵野の水路—玉川上水とその分水路の造形を明かす』2004 渡部一二
『春の小川はなぜ消えたか 渋谷川にみる都市河川の歴史』2011 田原 光泰
『地形を楽しむ東京「暗渠」散歩』2012 本田 創
『凹凸を楽しむ 東京「スリバチ」地形散歩』2012 皆川 典久
『みみずのたはごと』上下 1920 徳富 健次郎（現在の岩波文庫版を利用 1977）
『玉川上水と分水』1995 小坂 克信
『玉川上水 親と子の歴史散歩』1991 伊藤好一監修 比留間博著
『東京湧水せせらぎ散歩』2009 高村 弘毅
「杉並の川と橋」2009 杉並区立郷土博物館
「玉川上水論集 II」2003 羽村市郷土博物館
「武蔵野台地南部の水利用・水配分に関する教材化のための基礎研究」2006 小坂克信

武蔵野台地の風土や課題などを読み解くための散策コースづくりの
調査・研究と、それにそった散策会（歴史散歩）の実施

（研究助成・一般研究VOL. 36—NO. 214）

著 者 福田 恵一

発行日 2014年11月1日

発行者 公益財団法人とうきゅう環境財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷1-16-14（渋谷地下鉄ビル内）

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141

<http://www.tokyuenv.or.jp/>